

夢路の魔女

眠い……とても眠い。 外の暗さや寒さからしてもうそろそろ仕事の時間なのはわかるけれども……うう、布団の中から出たくないよー。

「ルナ……ルナー、もういい加減起きた方がいいよ」

ああ、やはり起こしにきましたか……さっきからスルーしまくってたから当たり前と言われたら当たり前ですね。

「ルナー、面倒くさいのはわかるけど早く仕事に行こう」

「まだ起きたくないんですよー」

「毎日こんなやり取りしてても結局行くんだから、さっさと準備しようよ」

「それじゃー、あと三分」

「だめったら！ 早く起きなよー」

「じゃああと三年」

「延びてるよ、それ！ 逆に延びてるから！」

「むにやむにや……」

「テンプレートな寝ぼけ方はいいから早くー」

「スピピピピピピピピー……」

「寝ぼけているというよりボケているよね！？ 僕に突っ込ませることを楽しんでるよね！？」

「そないなことあらへん」

「なんで関西弁！？」

「……」

「ダンマリ！！ 今度はスルーになったよ！！ というかやっぱり楽しんでるよね！？」

「楽しんでます」

「あっさり認めたよ、この人……」

「とりま私は布団から出たくないんです」

「さっさと仕事に行こうってば」

「そんなのいつでも行けますって」

「そう言って惰眠を貪るようなことする暇があったら仕事」

「別に惰眠を貪っているわけではありません」

「はいはい、正確には布団に身を包むという気持ちよさをみすみす逃したくないんだよね」

「そういうことです……羽毛に身を包むあなたと違って寒いんです」

「僕だって寒いの！！ さっさと力を取り戻したいんじゃないの？」

「むー……わかりました」

仕方なく私は布団から出る……彼の言う通り力を取り戻したいですし……。 それなりに彼との『ボケと突っ込み』という名のコミュニケーションを満喫した私は布団から身を出す。 ……布団から身を出すと thought よりも寒く思わず鳥肌が立ってしまう。

「やはり寒いですので布団の中に戻ります」

「決断が鈍るのが早すぎるよ！！」

「冗談ですよ」

パジャマのままひとまず洗面をしてから、さっきから私と話をしている彼に向き直る。私が毛布に身をくるむ間彼は一度も私を揺さぶったりしていない……否揺さぶることができない。 なんせその姿はカラスなのだから……それに鳥籠の中にいる。

「アルモも顔を洗わないとね」

「そう思うなら籠から出してほしい」

「もちろんです」

言った通りに籠の鍵を開けてやる……本来寝てる間に彼を籠に閉じ込めずに部屋の中をうろつかせてもいい。 彼がある余計な行為をしなければいいことなんですけれどね……。

「チャンス」

「早速ですか……ていつ」

「あだっ！！」

私は籠を飛び出して早速『余計なこと』を……私の下着とかが入ってる棚に飛んで行こうとした変態カラスを箒ではたいたのだった。

「痛いじゃないか！？」

「当然です。 痛くしたんですから」

流石に一乙女として下着を漁られるような真似をされたくないで籠に入れてる次第だ。 その辺でピクピクと痙攣している変態をよそにさっさとパジャマを脱ぎ捨て、お気に入りの制服に着替える。

「おっ、準備万端みたいだね」

いつの間にか復活していた彼は着替え終わったばかりの私の肩の上に当たり前のようにとまる。

「ええ、着替えは大丈夫です」

鏡の方を振り向きながら私は言う。鏡には肩に乗せているカラスと着ている服から魔女っぽいコスプレをしているように見える少女が映っている。だがコスプレをしているわけではない……私は本物の魔女なのだ。もっとも今はとある理由で力をだいぶ失っており、あることを除いてはそんなに大きな魔法を使うことはできない。

「それならさっさと今日の行く場所を決めようか」

「そうしましょう」

私はテーブルの上に置いておいた地図帳を取り出す……今日は日本にしようと考えて私は日本のページを開く。

「ど・れ・に・し・よ・う・か・な・て・ん・の・か・み・さ・ま・の・い・う・と・お・り」

「ルナって決めるの適当だよなー」

「いいじゃないですか、私はこの歌好きですよ」

「いや、ルナがいいならいいけどさ」

「えっと……東京ですね」

言いながら私は東京の部分丸で囲んでからそのページを切り取り、そのまま部屋に取り付けてある扉に向けて投げる。扉が自動で開きその紙片が入るとすぐに閉まる。しばらくしてから再び扉が開くが先ほど開いた時と違う光景が広がる。そう……すでに薄暗くなっているが、東京の上空だ。

「この扉って本当に便利だよなー」

「ええ、一種の『どこで○ドア』のようなものですからね……移動は本当に楽です」

言いながら私は箒を手にしてからそれを股に挟むように乗る。

「それじゃあ、しっかり掴まってください」

「はいはい」

掴まるというよりは私の懐に入る形だが、アルモが掴まると準備ができた私は扉をくぐりそのまま東京の上空に舞う。

「ふうー……寒いですね」

「冬だもん、それに夜だから仕方ないよ」

「ですね……冬が憎たらしいです」

「そんなどうしようもないことを言わないでも……」

「いーえ、憎いです。　そもそも冬は……」

下らないことを話しながら私たちは東京の上空をゆっくり降下していく。　ちょうどいい具合に目についたビルの屋上に降り立つと、そこから周りを見渡す。

「それじゃあとりあえず本日一人目のターゲットを探そうか」

「ええ、さっさと『グリード』を見つけましょう」

少し変わった形の眼鏡をかける……この眼鏡は視力には何ら関係がない。　ただ今言ったグリードを探すのに必要な道具である。

「……あれは……」

しばらく屋上から街路を歩き歩く人々を見ていると強烈に黒いオーラを纏う人間を見かける。　もちろんそんなもの常識的に考えて普通は見えるわけない……この眼鏡を使って見えるものだ……すなわち……。

「見つけたんだね」

「ええ、あなたの言うところの最初のターゲットを」

私はそのまま軽く駆け出すと直ぐ様箒に乗ってスピードをつけて飛んでいく。　そしてそのまま勢いよく例の人間のところを目指すように……。　数十mも離れていないところまで着くとそこでひとまず降りる。　行き交う人々は箒で飛んでいた私に目もくれずに進み続ける。　ターゲットがやがて少し道を外れて人があまりいないところに入っていった。　しめた……。　チャンスと踏んだ私は直ぐ様その人を追うように道を外れる。　その人はブツブツと何かを呟いていた。　だけど、私はそんなのに構わずその人に声をかける。

「こんばんわ」

「起立！ 気をつけ！ 礼！！」

「さようなら！！」

ふうー……今日の帰りのホームルームも終わったことだしさっさと学校を出るか。

「おい、京介。 どっか行こうぜ」

「おお、今行く」

友達に誘われた俺は特に帰ってすることなどなかったため、その誘いに乗ることにして鞆を手に持ち歩き出す。 街に駆りだした俺は行きたいところなどなくそのままついて行って時間つぶしに付き合っていた。

「なっ！！ 今の絶対初見殺しだろ！！ ライフが」

「くそっ！！ あんなところからゾンビが出てくるとは……」

「言ってる暇あったらどんどん撃ちまくれ」

時間つぶしと言ってもせいぜいゲーセンで遊んでいるだけだが、高校にもなって外での遊びとか正直それくらいしかない気はする。 不良とかならタバコ吸うとか適当にカモ見つけて金をとるとか、さいあく薬物に手を出すとかあるのかもしれないが、生憎俺はそんな人間でもない。

「あっ、……くそっ、ライフが尽きたし……コイン入れないと」

「うららららら！！」

シューティングでテンションをあげてる友人をよそに俺は何をするでもなくのんびりしている。 たまには交代してそれなりに楽しんでこそいるが、しょせんはそれなり……実のところしてもしなくてもいいような感じだった。

「それじゃあ、俺はこの辺で」

「じゃあな、京介」

ゲーセンで一通り遊び終えた後、別に人んちにまで行く気はなく俺だけ皆から先に離脱す

ることにした。 冬のためか夕方五時くらいで辺りはもう薄暗い……夏はこの時間でもまだ明るいというのに……。

「……」

友人達には冷めた性格のように俺は見えるだろう……俺自身も少しそう感じている。 中学の頃まではこんな淡泊ではなかったのだが、高校に入ってから俺はいったい何のために生きているんだろう、とか考えるようになってしまった。 しよせん俺の……いや、俺に限らず命は有限なもの……どんなに死ぬ時まで幸せと思える時間を過ごしてもお金を貯めていたとしても、死んだら俺に残るものなんて何一つとして存在しないのだ。 そう……命が有限である限り最後は何も残らない。 そう考えている俺だからありもしないはずの不老不死などというものにここ一年くらい憧れていた……その思いは募る一方だ。

「……はあー」

ため息しか出てこない……悪い癖とはわかっているのに、止めることができない。 気を休めるために駅に向かう前に俺はひとまず道を外れ、人気(ひとけ)の少ない場所に移った。 移ったところでどうというわけでもないが、そうしたい気分だった……人の少ない場所にすぐに移りたい気分だった。

「神様、仏様とかがいるなら願いを叶えてほしいものだけ」

人が少ないのをいいことに俺はつつい愚痴が零れ落ちてしまう。

「こんばんわ」

背後の方から突如声が聞こえるもまったく聞き覚えのない声でした……まあ、どうせ俺には関係のないことだろう……。

「あの一……無視しないでいただけますか」

妙に近くで同じ人間の声が聞こえた。 もしやと思って振り返ってみると案の定そこには俺の方を見ている人間がいた。

「あ、やっと気づかれましたか」

「……」

だが、その人に話しかけられてるとわかって俺は言葉を発しない。無言になったのには理由がある……目の前にいる少女……外見はなかなか可愛らしい感じである……これは別にかまわない。問題は服装だ……簡潔に言うと魔女の服装を……いや、コスプレをしているのだ。似合ってはいる……似合ってはいるけれどコスプレをリアルに見るとやはり痛い人に見えるよ。

「……うん、俺は何も見っていない。何も見ていないんだ」

俺はこの女と関わるなという直感に従いその場を去ろうとする。

「待ってくださいよ」

相手に素早く行く手を遮られる……仕方ない、さっさと用件だけ聞くか。

「えっと……何か用ですか？」

「ありますけれど、その前に挨拶をされたならちゃんと返さないとダメですよ」

「ああ……こんばんわ……で、何の用？」

「用件の前にまず話さないといけないことがあります」

「ほお……それで話さないといけないこととは？」

「私は魔女です」

「……」

やばい……これは本気で頭がぶっ飛んでらっしゃる方のようなのだ。

「じゃあ、この辺で」

さっさと話を切り上げて俺は今度こそ立ち去ろうとする。

「ルナの話をちゃんときけー！！」

「いだっ！！」

突然自称魔女とは別の声が出てから俺の頭に痛みが走る。頭上を見上げてみると一羽のカラスが俺を見下ろしている……声の主は誰だかわからないが、こいつが俺を攻撃したらしい。

「カラスの分際でふざけた真似を……」

「ルナの話を知ろうとしない奴が悪い！！」

「……」

カラスが喋るなどという光景を目の当たりにした俺は思わず絶句する。俺は幻聴でも聞いたのだろうか……？

「ほら、早くルナのところに戻った、戻った」

いや、紛れもなくカラスが喋っている。薬物とかに手を付けていない以上、これを現実と受け入れざるを得ない……。

「ようやく話を聞いていただく気になりましたか？」

「ああ……だが、確認したいことがある」

「何でしょう？」

「本当に魔女だってんなら魔法を見せてくれ。確かにしゃべるカラスなんてものを見ちまった以上は魔女がいる可能性が否定できないが、かと言ってあんたが魔法を使うの見なきゃ魔女だなんて信じられねえよ。人に見られるのがまずいとかなら場所を変えてもいいからを見せてくれ」

「その心配はいりませんよ。だって私はあなたにしか見えていませんから」

「なっ！！」

「見ててください」

そう言いながらルナとやらは俺がさっきまでいた道の方に行く。……あんな目立つ格好をする奴がいたら普通は誰かしら見るものではあるのに誰一人として振り向かない。

「おまけにこんなのは如何でしょう」

「あっ！！」

彼女は箒を取り出すとそのまま跨り宙へ浮き始めた……こんな非日常的場面がすぐ近くで見られているというのに誰一人として見ようもしない。……本当に見えていないんだ。

「……」

あまりのことに絶句している俺のところに彼女は戻ってくる。

「これで満足していただけましたか？」

「……ああ」

俺は今猛烈に歓喜にうちひしがれていた。これはまたとないチャンスかもしれない……俺の望みを……不老不死の体を手に入れることの……。

「さてさて私の用件なんですけれど」

「なあ、魔女さん……頼みがある」

「やはり、きましたか……予想はついています。あなたの一番の願いを叶えてほしいと
いったところでしょう」

「……驚いた。魔女はそんなことまでわかるのか？」

「私はあなたみたいなあまりに大きな望みを持っている人間を探しているんですよ。なので私が接触する人間はこのタイミングでたいてい何かしらのとてつもない願いを叶えてほしいと言ってくるんです」

この様子だと何人も対応してきているらしいな。

「それで願いというのは？」

「……俺を不老不死にしてほしい」

「なるほど……」

「そう言えば対価とかはあるのか？」

「そんなものはありませんよ」

何一つとして俺はリスクを負わずに不老不死の体になる……話がうますぎると言えばうますぎるが、そんなことなんかどうでもよく感じられるくらいにテンションが上がってきた。

「善は急げです……それでは早速」

彼女はおもむろに杖を取り出すと俺の方に先端を向けて……その先端から神々しい光が放たれ、その光は俺を優しく包む……。

「ただいまー」

「お帰りなさい、京介。夕飯できてるわよ」

「わかった、すぐに行くよ」

家に帰ってきた俺は自室に戻って荷物を置く……母さんに夕飯のことを言われたがちょっとだけ椅子についてくつろぐことにする。

「……全然実感がわからないな」

あの光が消えた後、あの魔女は「これで大丈夫」と言ってそのまま去ってしまったのだ。体が本当に不老不死になったのか不思議でならない。

「試してみるか」

本当に不老不死というならおそらく死に関わるレベルの傷とかは治るはず……そう考えて俺はカッターナイフを取り出して、手首にゆっくり当てる。

「本当に不老不死になっていなかったら、ここで人生が終わるのかよ……」

そう考えると少し怖くなってきた……けど、やらなければ確かめられない。

「……っ、いづ！！」

その痛み思わず表情が歪んでしまうが仕方がないこと……傷口を見ると鼓動に合わせるかのように血がピュッ……ピュッ、と飛び出していた。

「うっ……」

自分でやっとしてなんなんだが血を見るのが俺は苦手でその光景を直に見て少し嘔吐感が走る。……血が出て死ぬかもしれないというのにこんなことを思い出すとは呑気なものだ。

「……ん？」

手の痛みはまだ続いているのだが、変な感触が手首に走り始める……何とも形容しづらい感触だ。痛みもあるのだがむず痒いような……。

「……」

もしやと思い手首を見てみると徐々に傷がふさがっている光景があった。

「……スゲー……」

俺は本当に不老不死になってしまったらしい……やっ実感がわいてきた。

「そうだ……命が無限になったんだ。何も残らない最後が訪れないんだっつっつ！！」

こんなにテンションが上がったのは久しぶりだったが無理もない。自分の待望の夢が叶ってしまったのだから。

「京介一、変な叫び声あげてないでさっさと降りてらっしゃい」

「悪い悪い、すぐ行く」

普通は恥ずかしいとすら感じるような叫びを聞かれても気にならないくらい俺は浮かれていたのだった。

翌日、俺はいつもと同じように登校する。志はいつもと違ってはいたが……。

「はやっす、博人」

「ああ、おはよう、京介……って京介？」

「どうした？」

「あ、いや、お前から挨拶されたのは初めてだったような……」

「そうかな？ ……いや、そうだな」

確かに俺はこれまで友達相手にろくに挨拶なんてしてきていなかったような気がする。無気力が俺の行動にも影響していたのだろう。無気力だったんだ。だけど、今の俺は昨日までとは違う。

「まあ色々あったんだよ。変わろうとするきっかけとかがあったりとか」

「ふうん。何かあったんだ。聞いてもいいことか？」

「聞いてもバカバカしいと思うようなことだから気にするな」

「あっそ。じゃあ聞かないでおく。それより今日の理科の宿題やってきたか？」

「ゲッ、やってきてねえ！！ 博人見せてくれ！！」
「自業自得だ、諦めな」
「クー、友達甲斐のない奴め！ 仕方ない、明良頼む！」
「……えっ？」
「今の間は何だよ！？」

今までこういったやり取りは全然していなかった……こんなバカバカしい会話とかもどうせ死ぬ時には消える思い出と考えてたから。 でも消えないなら思い出を積み重ねていくのもいいと思い始めた。

あれから数ヶ月経った。

「起立！ 気を付け！ 礼！！」
「さようなら！！」

いつものように帰りのホームルームが終わる。 よし……。

「明良、博人。 ゲーセン行こうぜ！」
「ああ、いいぜ。」
「了解っと。 準備するから少し待て」

二人をさっさと誘って俺はいつもみたいに街に駆り出す。 まだ寒さはあるがもう一ヶ月もすれば三月……徐々に暖かくなることだろう。 大学受験のこととかもいい加減視野に入れないといけなくもなるだろうが、そういったことは今は忘れて楽しんでいた。

「うおーっ！！」
「うおっ！！ それは反則！！」
「勝てばいいんだよ、勝てば！」
「言ってくれるな……なら、俺だって！！」

以前に比べて皆と遊ぶようになった……今いるゲーセンでは格ゲー、レース、シューティングとかも付き合っている……というか心のもやもやが晴れるだけでここまで楽しめるようになるとは俺もげんきんな奴だ。

「ふう、楽しかった」

「そろそろお開きにするか……俺はちょっと帰る前に買っていきたい物あるんで今日は先に買えるわ」

「オッケー。じゃあ、また明日、明良」

「じゃあな、明良」

「おう、また明日」

先に離脱した明良だけ見届けてから俺は博人と帰る。数か月前と比べて辺りはまだ明るさがあるが代わりに寒さは異常だ……。ゲーセンを出たばかりだというのにまた適当にどっかの屋内に入りたくなくなってきやがったぜ。

「寒すぎるぜ」

「仕方ないって京介。なんならどっか適当にコンビニ寄っておでんでも食うか？」

「そいつはいいな」

博人の言葉に乗って俺たちはコンビニに入る。おでんを買う前に適当に立ち読みとかもして少し時間をつぶしてから買うもんだけ買ってコンビニを出る。

「やっぱ冬は温かいもんに限るな」

「まったくだ……んぐ、ゴクン……ところで京介？」

「なんだ？」

「前々から思ってたんだが何があったんだ？」

「……よくわからないんだが」

「ああ、それもそうだな。なんて言うかさ……友達の俺らが言うのもなんなんだけどさお前はちょっと前まで結構人付き合いとか悪かったし淡泊だったじゃないか」

「……確かにそうだな」

「なのに突然皆と話をよくするようになったし、遊ぶようになったし、でも勉強はちゃんとしているし……いい意味でお前変わりまくってるからさ」

「なるほどね」

数か月前までの俺とは別人……それは俺自身も自覚している。そりゃそうだ。不老不死のおかげで価値観が変わったんだから。

「まあ何があったかなんて気にしなくていいだろ。人間誰しも変わるものさ。俺だってそれは同じってだけだ」

「ん、それもそうだな」

「んなことよりさ、次は土曜日にカラオケに行かないか？」

「いいな、何人で行く？」

「光とか安藤あたりも誘って五人くらいで」

「じゃあ二人には俺から声かけとくよ」

「了解」

俺はこうして青春時代を過ごしていった。願いがかなったおかげで俺は享受してこなかった楽しみを満喫するようになっていた。勉強はある程度していたとはいえ始めたのも遅かったためか大学受験は一年浪人はしたものの無事有名国立に入ることもできた。大学時代では新しい友達もできたし自分が専攻していた研究もしていった。ちゃんと楽しめていた。少し心残りがあるとしたら件の魔女をあれっきりまったく見かけていないことだ……今一度会うことができたならお礼が言いたいのに。

「おーい、もたもたしている暇はないぞ」

「おう」

今は休暇を使って海に面した山を登っているところだ……ちなみに現段階で小雨、博人が言うには帰りくらいから大雨になるらしい。やれやれだ。

「こんな雨の日じゃなくてもいいだろうに」

「仕方ないって。明良の都合があうのが今日しかなかったんだから」

「危険を冒してまでじゃなくてもよからうに」

こう愚痴っていても俺は楽しんでた……どこかしらまさか事故に巻き込まれることなんてないだろうと油断していたんだ。

「よし、やっと着いたー！！」

小一時間したくらいだろうか……やっとのことで頂上に着いた。

「なら、後は帰るだけだな」

「そういうこった。……ってあれ？」

「どうした……って、うわっ！」

急に雨が激しくなり始めた。これから帰るところだというのに……幸先が悪いな。

「おかしいな、一応天気予報ではもう少し後のはずなんだが」

「はずれることだってあるし、そもそも山じゃ気候が崩れやすいから仕方ない。それより……ないとは思いますが土砂崩れとかに巻き込まれたり、誤って海の方に落ちたりなんかしたら洒落にならねえ。さっさと帰ろうぜ」

「その通りだな」

少しだけの休憩をはさんでから俺らは再び元来た道を明良、博人、俺の順で歩いていく。雨雲のせいで周りが少し薄暗いな……注意して歩いて行かないと。

「うわっ！！」

その時だった。前の方から急に博人の叫ぶような声が聞こえたから足元だけに注意を払っていた俺は直ぐ様振り向くと、博人の足場が崩れつつあった。肝心の博人は危うく近くにあった蔦に掴まってはいるが、そんなに長くは持ちそうには見えなかった。

「やばい、助けてくれ！！」

博人は蔦に掴まってはいるも俺らが引っ張らなければ落ちてそのまま海の方に転落してしまいそうだった。

「踏ん張れ、今助けてやるから！！」

俺と明良がすぐさま駆けつけて博人の掴む蔦を引っ張り上げていく。

「ぬおー——！！」

「ぬぐぐぐぐぐぐぐぐぐ！！」

蔦を引っ張り上げることは無論楽なことではない……だが友人の命がかかっている場面でそんな弱音など吐けるはずがない。俺はただがむしゃらに引っ張ることだけに専念していた。

「……いづっ」

手に痛みが走る……こんなに痛むもんじゃない。 でも……

「だからって俺は諦めたりしないんだよー！！」

必死に引っ張った末になんとか博人を救出することができた……ったく、まさかの事態が本当に起きるとは思ってもいなかった。 ふと手を見てみると血が少し滲み始めていた。これくらいで済んでよかったと思う。

「ハア……ハア……たす……かった。 本当に……ハア……ありがとう」

「気にするな。 命が無事で何よりだよ」

「いや、……本当に助かった……ハア……お前たちがいなかったら……ハア……本当に死んでたかも……しれなかった……ありがとう」

「だから気にするな。 友人として当たり前のことをしただけだ」

「でも……」

「そんなに気にするなら次からこんな日に山を登るとかいう無茶ぶりを控えるようにしてくれ」

「あ、ああ。 もちろんだ」

「よし、さっさとこんな危ない場所は降りるぞ」

「だな、さっさと降りるか」

そう言って俺らは歩き出す。 ボゴッ！ 変な音が足元あたりから聞こえると突然俺の視界が急に二人から遠ざかり始める。

「えっ？」

別に俺がゆっくり歩いているわけでも、あいつらが早すぎるわけでもない。 何が起きて……？

「京介ー！！」

「京介！！」

二人は俺の方を振り返るなり顔を真っ青にして叫ぶ。 ああ、そういうことか。

「俺が今度は落ちたのか」

普通は冷静にいられるはずがないが、俺は落ち着いていられた。もちろんまったく動揺する気持ちは少しはある。こんな事態だから当たり前だ。

「不老不死がこんな形で役に立つのは考えていなかったな」

あの二人と違って俺は死ぬことはない。何とかして生き延びてから適当に言い訳を言いつくろえばいい話だ。間違いなくこんな天気 of 海に落ちれば苦しむのは目に見えているが、それは覚悟するしかない。

「あがっ！！」

そのまま海に落ちるわけではなく落ちる最中に何度か俺の体は岩場にぶつかって骨が折れるような音がしながらも海に向かう。

「くっ」

そして海にそのままダイブ……荒れ狂う海は俺をそのまま飲み込む。海に飛び込むまでに苦痛を味わっていた俺はそのまま意識を失ってしまう……。

……く、苦しい。いやに苦しい。目をゆっくり開けると海の中にいる俺がいる。

「グブッ！！ ゴボッ！？」

満身に呼吸するどころか口を開けると息が漏れ出てしまう。どうやらまだ落ちた直後らしく全然痛みがおさまっていない。目も海の水がしみてまともに開けることができない。痛みをこらえて泳ごうとするも骨折のためか手も足も全然動かせない。

「……」

こうなったらしばらく苦しみをこらえてでも骨折が治るのを待つしかない。以前手首を切った時にもあったが、修復は早いはず……普通だったら死んでしまうだろうが俺の場合少々耐えればなんとかなるはず。骨折の修復にどれだけの時間がかかるのかわからない。正直それまでの苦痛は異常なのだろう。

「……っ！！」

息ができない……なんだ、これ。 嫌だ、こんなのを味わうなんて。 早く解放されたい。

「ゴバッ！！」

息を吐き出してしまうことでさらに苦しみが増す。 これは喧嘩とかそういう時に味わうレベルじゃねえ。 ……不老不死の身のくせに思わず死に対して恐怖を抱いてしまう。 不老不死のくせにまったく……。

「……ブゴッ！！」

そんなくだらないことを考えてる間に再び苦痛が増す……。

十分以上は経ただろうか……。 普通はもう死んでもおかしくないだろう。 だが俺は……。

「……ッ！！」

不老不死の体で未だに生きてはいる。 とはいえ正直死んだ方がマシとすら思えるような状態だ。 だが手や足がわずかだが動かせるようになっていた。 これならもうちょっと耐えれば……。

「グッ……ッ」

それでも苦痛はもう味わいたくない。 早く……早く治ってくれ。 思わず海の中にいたままで目を開けてしまう。

「……！？」

そこに思いもよらない光景がとびこんだ。 巨大な何か……恐らく岩だろうな……それが落ちてきている。 この大雨によって発生した土砂崩れの際に落ちてきたのか？ だが、あんなのを受けたところで俺は死にはしな……。

「……ッ！！！」

いや、まずい！ あんなのが俺に落ちたらまずい。 確かに死にはしない。 死にはしないが、あれが俺の上のしかかったら当分動けなくなる。 いや、当分とかいうレベルじ

やない。下手すれば半永久的になるかもしれない。いつかは風化して出られるかもしれないが、そんなの何十年後の話だ。その間ずっと海の中で苦痛を味わったままだなんて地獄だ。それ以外のなにものでもない。

「……ゴブッ！！」

なんとかして少しでも泳ごうと試みるも雀の涙程度しか進まない。その間にも岩はあつという間に迫ってくる。ダメだ！ あんなのが落ちたら俺は……！！

「ブガッ！！」

だが俺の祈りが通じるはずもなくそのまま岩が覆いかぶさるかのように俺を押しつぶす。そんな……俺はこれから苦しんでいかないといけないのか？ この数十分ですら二度と味わいたくないような苦しみだったって言うのに、それが数か月、数年、それとも数十年？ ふざけるな……そんな期間もずっと一人で苦しまないといけないのか？ それくらいならまだ死んだ方がマシにも思える。嫌だ、早く出たい！

「……ッ！！」

だが、無情にも苦痛だけは続く。なんでこんな目に……。

「ムグッ！！　ングググ……！！」

不老不死がこんなところで仇をなすなんて……クソッ！！　これからこの苦痛と共にここにいるなんて考えたくもない。あの魔女に会った時に不老不死を頼んだ俺を愚か者と思ってしまう。なんて浅はかだったんだ！！　チクショウ……チクショウ！！

そんなことを考えても苦しみは変わらなかった。何を考えても、何か抵抗しようとしても状況は何一つ変わらなかった。それがしばらく続いた。どれくらい経ったかなんてわからないが、そんな数日も経ったわけではないだろう。苦しみはまだ続く。ただ苦しむ時間が過ぎていくだけだった。……誰か……誰か助けて。何回かそう願ったりもしたが状況は変わるはずがない。当然だ、普通死んだと思われるし、たとえ探索されたとしてもこんな岩の下だなんて見つかるわけがないだろう。その内俺は考えるのも嫌になってきた……こんな時間に何かしようだなんて馬鹿らしい……何もせずにいよう。苦痛はあるが、そのままでいよう。でもそんな時間をずっと享受するだなんてあんまりだ。今一度意識を閉じたかった。どうせなら永遠に意識を閉じたいが、それは不可能だろう。それでも今一度意識を閉じるくらいは許されかった。俺はそのまま動かず、何も考えず

苦痛を受けたままそこにいて……そして意識を失った……。

「……はっ！！」

「お気づきになりましたか？」

「お前は！？　　というか、ここは！？」

さっきまで海の中にいたはずだったんだが……これはどういうことだ？　それに目の前にいるのはあの時の魔女……場所も願いを叶えてもらった時の路地となんら変わっていなかった。　　どういうことだ？

「どういうことだ、って顔をしていますね」

心をももの見事に読まれているし。

「当たり前だ。　　なんでさっきまで海の中にいたのにここにいるんだ？　　脱出できて願ったり叶ったりではあるが何が起きたかさっぱりだ」

「簡単に説明するなら私はあなたに未来を見せたんですよ」

「未来……」

そんなものを見せられていたのか、俺は。

「もちろん、今あなたに見せたのがそのまま未来になるわけではありません。　　あなたが見た未来の途中に存在した別の選択を手にしていれば別の未来があったかもしれませんし、それが輝かしいものだったかもしれません」

「……」

「でも、あなたが選んだ不老不死は少なからずあなたが味わった苦痛の未来に繋がることでしょう」

「少なからず？」

「だってそうでしょう？　　不老不死は今見せた未来でなかったとしても人類が減んだ後の……それこそ地球が金星とかみたいな環境になって不老不死の体を持っていてもあまりの熱で苦痛を味わったまま動けないことだってあり得るのですから」

「……！？」

聞いたことある。　　地球はいずれエネルギーが枯渇して、最終的には金星のような環境に

なるかもしれないって……。 そんな状態になってしまえば半永久じゃない……。永久だ。永久の苦痛を味わうことになるんだ。

「……ッ！！」

ゾットした。 考えるだけで狂いそうだ。 海にいたあれだけの時間でも半ば人格が壊れるかと思ったんだ……。永久の苦しみなんて狂うなんてレベルには思えない。

「さて……」

「……ッ！？」

魔女が俺の目を見て眩きながら顔を近づける。

「今一度あなたに尋ねます。 本当に不老不死の体が欲しいですか？」

彼女は微笑みを浮かべて俺に尋ねてきた。 多分他の人がこの顔を見たら優しい微笑みに見えたことだろう。 でも今の俺には彼女のその笑みがまるで死神の誘いのように恐怖を放っているように見えた。

「うっ、……うわーーーーっ！！」

俺はノータイムで駆け出した。 その場をすぐに離れた。 振り返らずにただただ走っていった。

「ハア、ハア、ハア、ハア……」

どれくらい走っただろう……。道行く人々にぶつかりそうになってもなんとか避けながら走り続けていくが、結局誰かにぶつかってそこで止まってしまう。

「ハア、……ハア……すみません」

「あ、こちらこそすみ……って京介？」

「……あ」

ぶつかったのは別れてからさして時間の経っていない明良と博人だった。

「どうした、いったい？」

「お前にしては珍しく慌ててるな。　なんかあったか？」

「……いや、何でもない」

不老不死は恐ろしくバカバカしい欲求だった。　いずれ耐えられない苦痛を約束しただけのものだった。　それがわかった今願いに拘る必要はなくなった。

「悪い、悪い。　気にしないでくれ。　そんなことより気が変わったんだ。　ちょっとお前んち寄っていいか？」

「ほう、お前から来るとは珍しいな……いいぜ、俺のぷ〇ぷよのテク見せてやるよ」

「そんなに自身があるのか……じゃあハンデつけさせてもらおっかな」

「オッケー。　それでも勝てる自信はあるからな」

最後は今まで積んできたものが消えることは変わってない……でも考え方は変わった。　死ぬ時に今までの人生を後悔してしまうようなことにしたくない……手放すことになったとしても幸せだったと思える人生を過ごしたい。

「もたもたするな、京介。　置いていくぞ」

「今行く」

もう楽しみを自分からはねのけるようなことは止めにしよう……そうしよう。

「とりあえず任務完了かい、ルナ？」

「ええ、無事グリードを回収できましたよ」

私の手元には先ほどまで話していた男性が身に纏っていた黒いオーラ『グリード』を吸収し終えた瓶がある。

「それにしてもグリードはどんどん出てくるね」

「ええ。　人は欲は必ず起きるものです。」

そう、欲は誰も持っているもの。　だから、あの黒いオーラは誰も内に潜めているのだ。　ただそれがあまりに現実離れたもの、願ってもかなうはずのないものとかになると体から溢れんばかりの巨大な黒いオーラとして身を纏う……それが『グリード』。

私はある事件をきっかけに失った膨大な魔力を再び取り戻すためにこのグリードを集めているわけだ。私のグリードの回収方法は相手に夢を見せることでその欲を捨てさせることだ。

「別にさっきみたいに未来だなんて嘘つかずに夢って正直に言っちゃえばいいんじゃないの、ルナ？」

「うーん、それもそうなんですけどね……まあ今回は未来って言った方が都合がよかったですから」

「それもそっか」

私のやり方はこうだ。ターゲットの欲求を聞きだしてから、素早くその欲求を諦めたいようなストーリーを考える。と言っても通常の頭ではそんなすぐ考え付けるはずがないので魔法を使ってだが……ともかく即興で考え付いたそのストーリーを夢として相手に見せるわけだ。あとは簡単、その夢を見ることで欲が叶った姿に絶望して、その人の中からグリードが捨て去られる。そのグリードがなくなる前にさっさと特注の瓶の中に封印するという寸法だ。こんな作業ではあるが夢を見せることも決して楽でない魔力をそれなりに消費するから精神的に疲れはたまる。正直ずっとこんなことをせずに普通にアルモと一緒に暮らしていくこともできなくはない。不自由はしないわけだから。それでも膨大な魔力を取り戻すために努力を続けるのには理由がある。

「でも本当にありがとう、ルナ」

「何がですか、アルモ」

「いや、僕を元の姿に戻したいからっていつも疲れさせて」

「それは言わない約束ですよ、アルモ。気にしないでください」

アルモは今でこそカラスなんて情けない姿をしているが、本当はそれなりに魔力が宿っている鳥人だった。先刻語ったとある事件で私を守るためにこんな姿に変えられたのだ。そう……私のせいなのだ。彼は私を愛するが故に私の代わりに罰を受けてこうなった。同じく私が愛しているというのに……そんな気持ちを抱えているとわかっていながらも彼は引き受けたのだ……私に罪悪感を背負わせてしまうかもしれないのに、それでも私の命を守ることに徹したのだ……まったく、この人は。

「まあ、そういうところも含めて私は好きになったわけですけど」

「なんか言った、ルナ？」

「いえ、何も。ともかくもうお礼なんて言わなくていいんです」

「わかった、ルナ」

「その代り……」

「その代り？」

「……」

今から言うセリフがとても恥ずかしいためについ顔が赤くなっていく……だが、やはり言いたい気持ちもどこかしらあったのではっきりと、笑顔で言うようにつとめる。

「無事あなたの姿がもとに戻ったら私をギュッと抱きしめてくださいね」

「……」

「……」

「……」

「……えっと、何か言ってもらえないと恥ずかしいんですけど」

「超絶可愛いよ、ルナー！！！」

「……はい？」

「むっちゃ可愛かった、ルナ！！ もう一回言ってよ、ルナ！！ 僕はそれだけで昇天しちやいそうなくらいに幸せだよ！！！」

「もう言いません」

ちょっとやりすぎだったみたいですね。 これからは控えないと。

「ええ、もう一回だけ、もう一回だけでいいから！！」

「ダメですって……って、あら？」

「お願いしたら、ルナー！！」

「そうも言ってられませんよ、アルモ。 次の『ターゲット』です」

「ちえっ、タイミングが悪いな。 でもそれなら仕方ないか」

「仕方ないです。 さっ、早くターゲットに追いつきたいので早く私に掴まってください」

「はい」

「準備はいいですか、アルモ？」

「大丈夫だよー。 いつでもオッケーさ、ルナ」

「それでは行きますか」

一応アルモが私の懐に入っているのだけ確認してから私は再び箒に乗って夜空に舞う。次なるターゲット……もといグリードを纏う人間に夢を見せるために。

